國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 虫と仲良く

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 健, Noro, Ken メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000626

虫と仲良く

野呂 健

私は昆虫学者ではない。小学生のころ大学の農学部昆虫学教室に出入りしていた昆虫少年ではあったが。そのころ一つ学んだのが、虫や動植物には学名という世界共通の名称があつて、それがラテン語にのっとった形式で書かれていくということであつた。ラテン語がどんな言語かなぞ知る由もない。偉い先生の図鑑にたくさん出てくる、英語とは少し違う変な横文字語が外国語初体験であつた。

考えてみれば不思議なことだが、「きゃあ、虫がいる！」と叫ぶとき、その虫はたいてい俗にいう不快昆虫である。しかも、「*きゃあ、昆虫がいる！」とは誰も叫んでくれない。使い分けがある。私たちは体内に虫を宿しているというのに、その虫には「*きゃあ、虫が宿っている」とはまず言わない。虫偏がつく蛇、蜥蜴、蛤なんかはみな地面を這いつくばつて進むから、蝶などと違ってさげすみの対象になるのかな。蛤はおいしいのに。体内にある虫様筋はミミズそっくりだ。そういうえば、蜻蛉は飛ぶのに虫が二つもついているし蚊も虫偏だ。

日本語にはいろいろ不思議な表現があるが、虫がらみも多い。「どうも虫の居所が悪い」「あいつは虫が好かない」「虫の知らせ」「ふさぎの虫が起こる」「腹の虫がおさまらない」「虫のいい話だ」などなど。これらの表現からすると、虫は体内に住んでいるようだがはつきりしない。齋藤秀三郎の『齋藤和英大辞典』では、いずれの表現の英訳にも虫に該当する単語は出てこない。少し古いが、「娘が東京で一人暮らしになるのだが、悪い虫がつかないか心配だ」の場合には、体の外からまとわりつくようだから同じ虫ではないらしい。この悪い虫はオスであることが顕著なので、男は虫扱いだ。定年を迎えると粗大ごみやぬれ落ち葉になるらしいが、虫とどちらがいいか思案のしどころだ。この表現には、男バー

ジョンはない。「*息子が東京で一人暮らしになるのだが、悪い虫がつかないか心配だ」はおそらく不適格文である。「悪い○○○にひっかからないか心配だ」は両性に可能だろう。幸い男性でも女性でも字数は同じ三文字だ。

辞書というものは偏見のなさでは立派なもので、こんな「虫」にまできちんと語義を定めてくれている。『新明解国語辞典』では、虫は「体内にあって、人間の心的状態を左右すると考えられるもの」と説明されている。「考えられている」のだからはっきり実体がわかっているわけではない。当節はやりの英語発カタカナ日本語を使えば、「エヴィデンス」に基づいていない。人間の心まで左右してしまうのでは、まるで超自然的な力を持つ神ではないか。神の居場所が人間の腹の中とは思わなかった。どうりで最近腹が出てきた。

英語においては、虫の出る幕はない。昆虫採集などという夏休みの宿題が出た国と、そんなもの意識にも上らないお国柄との違いは顕著だ。もつとも彼の地では夏休みは学年の境目だから、宿題などあり得ないが。アリとキリギリス、蛭端のコオロギ、そして貧民街を描けば不潔の象徴としてのゴキブリ程度だ。「虫めづる姫君」なんてありえない。最近あまり耳にしないが、「夜の蝶」なんていう表現もあった。夜の蝶なんてフランス語で表現したら *papillon de nuit* だからただの「蛾」でしょう。ちなみに、フランスの百科事典では蝶と蛾が区別されていないらしい。断っておくけれども、かつての昆虫少年も「夜の蝶」には手を出さなかった、というか出せなかった。

いろいろ考えると、私たちは、体内にいて私たちの精神・心理・そして肉体を黒子のごとくに操っている虫と仲良しるのが得策だ。でないと、心の持ちよう、思考回路、行動が外れたものになりそうだ。まあ、虫が変な活躍をしないように、仲良くしていくのが一番だが、なにせ架空の存在だから双利共生は難しそうだ。

(例文についている星印は、不適格、または容認可能性の低い可能性を示す印である。)

(英語学・英米文化論)